

幼稚園に於ける優秀児の取扱

中村楠雄

六八

今假りに一人の保姆が、三十人の子供を擔任したまひました時、往々其の中から、他のお仲間より總てに一段と優秀性を持つ子供——平たく言へば進んだ子供——を見出すものであります。

又他の事は餘りバツミしないが、或る何か一つの事に仲しい素質を持つてゐるらしい事を、發見する場合もあります。

兎に角、以上の様な子供を總稱して、こゝでは優秀児と名づけて見ますが、これらの優秀児に就て、私共はよく考慮した教育をしてゐるであらうか、如何に考へてやるべきであらうか、さういふ様な事柄に就て、記述して見様と思ふのであります。

勿論此の問題は新らしいものではなく、幼稚園にしても、小學校にしても、從來論ぜられ、且つ多少の具體的な試みもせられたのであります。其の實際に就て見ますれば、決して至れりと言ひ得る現状ではないと考へられます。

そこで私は、少なくとも幼稚園では、此の問題に就て、今少し熱度を高めて、具體的な切實な研究を、努力がほしいと希望するのであります。

かく言ひますと、或は、幼稚園では、そんなにまで窮屈に考へなくてもよろしい、只多くの子供を楽しく遊ばせさへすればよいのだ、さういふ風の論者があるかも知れません。まことに其の説の通り、只楽しく遊ばせさへすればよいのであります。其の楽しく遊ばせる爲めには、かへつて

大いに、此の優秀兒の取扱い方方面なごに、工夫を要するのではないか、と思ふのであります。

私共の實際の經驗から申して見ましても、こうした方面に不注意になりますと、さうも子供がよく遊んでくれません。

例へば、手技をやるにしても、何しろ一團の子供の中には器用、不器用の差のあるのは勿論の事です。さうするご其の中の、數人の極器用な子供、つまり其の方面に優秀な數人は、早く仕事を仕上げてしまつて、さて後はさうするでせう。そこは子供の事ですから、決してちつち致しはしません。いらぬおせつかいを始める。他人の邪魔をする、争ひが起る、騒ぐ、泣く、さいつた結果を生じてくるのであります。

かゝる状態は申すまでもなく、その優秀なる子供にまつても、はたまた、他に子供にまつても、決して楽しい遊びの姿ではありません。むしろ伸び行く芽をつみさり、惡の萌芽をつちかつてゐる様なものでありませう。

これでは決して、子供を上手に遊ばせるごは申されませ

ん。そこで若し、そこに一工夫されて、力のある子供には、其の力に相應した作業が、與へられるならば、それらの子供は、みんなにかゞやかしい希望に胸を躍らせ、嬉々として仕事に熱中する事でせう。さうして、さういふ氣分、空氣が、自然他の子供にも影響して、やはり力相當、自己の仕事に熱中するに至りませう。こゝに力あるものは、益々伸ばされるご共に、また全體としての進展ご幸福が見出されるのであります。

優秀兒の取扱なごいふご、變に角ばつて聞えるが、つまり個性に即し、能力に應じた取扱ごいふ事になるので、吾々は幼兒の保育に忠實なれば、當然考へねばならぬ問題なのであります。

斯の如く、優秀兒の取扱ごいふ事にまで、よく工夫されてこそ、所謂ごの子供にも時ご場所を得させるご言ひますか、即ち全體ごして没頭的な、一生懸命な生活をさせる事になるのだご思ひます。

幼兒を預る吾々の仕事は、ごの子供も、いつも、嬉々として、生命を打ちこんだ生活をさせる事にあるのだご思ひ

ます。言ひかへますと、幼児の生活を充實させる事なのだと考へます。

して見るに、優秀兒に特別に留意してやらねばならぬのは、幼兒教育の本質からしても、當然の事ではある、かくてこそ、ごの子供にも充實した生活をさせるまいふ事になるのだと思ひます。

今私の優秀兒の取扱ひを力説する所以は、一つは保育者の當然の任務だといふ事を、更らに高張したいの事、今一つは、其の當然の責務が十分にはたされてゐるや、否やの、注意を喚起したいまであります。

三

この優秀兒に對する、多くの父兄、保育者の考を便宜上大別しますと、

イ、さうしてよいかと迷つてゐるもの。

ロ、何にも手を加へずに打ち捨て、置こうとするもの。

ハ、出来るだけ手入れを仕様とするもの。

の凡そ三つになるのでなからうかと思ひます。

さてイはまづさし置きました。ロとハについて論究して

見ますが、これが即ちイロハ三問の解答になるのだと考へます。

私の考へを以てしますれば、全然手を加へまいとする事も、決して穩當でなく、それが言つて、出来るだけ手入れをして行かうとする事も、この文字通りでは承服出来ないであります。

然らば如何にすればよろしいか、今實例をあげて述べて見たいと思ひます。

時々幼兒の保護者から受ける質問は、一體入學前の子供に文字の生活や、數の生活をさせてよろしいか、さうかといふ事であります。こゝで申します文字の生活や數の生活をさせて宜しいかさうかといふ事は、つまり積極的にやらせてよいかさうかといふ意味になるのでありますが、これは避けたがよいと思ひます。なぜかなら、それは荷がかち過ぎて、幼少な身心の發育に障礙を來たす心配があるからであります。

しかしそれでは打ち捨て、置こうとしても、さうした生活は必然に生じて來るのであります。例へば、ま、ご遊び

を致しましても、日用品の買入れなどの場面には、必らず幼稚ながらも数の生活を體驗するのであります。其他各種の遊びの中には、其の数の生活を要求する場合は相當多數に含まれて居るのであります。又文字の遊びにしましても、お兄さんや、お姉さんのお勉強のまねをしたり、お兄さん達の學校でつこにお仲間入りをしたり、お姉さんといつしよに繪本を見たりといふ具合に、いつしか文字の生活に入つて行くのであります。

所で子供は段々、これらの生活に興味を持つて來て、自ら發動的に一層度を強めて、或は深く、或は博く、其の慾求を満足せしめ様とするに至ります。

然らば、かゝる場合にも、手を加ふるは悪しき事として打ち捨て置くべきか、實にこゝこそよく考へねばならぬ點であると思はれます。即ちさうした場合に、程よく指導され、適度に満足せしめられてこそ、彼等は益々元氣つき、希望に輝やくのであります。そこに良き發達は見出されるのであります。それに折角の美くしい望も、何ら相手にされず、そのみか不必要にして退けられる様な目に合はさ

れたなら、さうして素直に伸びて行かれませう。或は人間全體として萎縮してしまふか、或は勢力の餘る所多くは悪しき方向へ傾むくのであります。

要するに、數や文字に就ても、餘りに子供の年齢に精神の發達程度を無視して、積極的に働きかけ過ぎるから惡いので、子供の自發的要求を中心として、適度に輔導するのこそ本當に正しい教育的態度だと思ひます。

そこで優秀兒に手を加ふるは可か、加へざるは可かの問題にたち返へりますが、つまり此處に數の生活なり、または文字の生活なりに比較的興味を強く持つてゐる子供がありましますなら、即ち其の方面の優秀兒がありましますなら、既述の理由より考へても分る通り、適度に輔導を加へるのこそ本當だと思ひます。唯くれぐれも注意すべきことは、本人の要求以上には出ぬこと、荷がすぎぬことである

ます。其の他の各種の遊びにも、それぐの優秀兒に良き注意を指導が加へられる事は、實に望ましい事であり、最早説明するまでもない事と思はれます。

さて以上の様な精神で育てられた子供は、小學校へ行つてから、その先生達から、多くさんな眼で見てるられるか、さいふ事に關して少し考へて見様と思ふのであります。まだ、今でも小學校の先生の中には、随分つめたい眼で幼稚園を見てゐる人の相當にある事でありませう。わけもなく幼稚園さいふものに、反感を持つてゐるらしく思はれる事もあるのであります。

一體これは何故か言ひませう、幼稚園から來た子供は落ちつきがない、何か知つた顔をして邪魔になる、教へ過ぎてゐる等と思はれる點にあるらしいのであります。幼稚園へこない子供も、幼稚園を出た子供も、くらべませう。一見幼稚園を出た子供は、お行儀がわるい様に見えませう。一方は始めての生活のために、恐い、さいふ様な心も手傳つて、萬事ひかへ目にしてゐるものに、一方は先生にも、建物にも、團體生活にもすつかりなれてゐるもので、遠慮なく、先生に飛びついても來ませうし、話しかけてもきます。先生に教へられずとも、一人で便所にも行きますし、運動

場に行つて遊びもします。之を見た學校の先生は、一年生さいふものは本當に何にも知らぬ、自分の言ふ通りにばかりなるものさ一人できめてゐるた豫期も、すつかり相反する感じを抱くのであります。そして結局幼稚園から來た子供は可愛げがない、子供らしくない、だから幼稚園へやるのはよくないさいふ事に落つくらしく窺はれるのであります。

これを幼稚園の先生から言ひませう、誠に殘念な話では、かんでばかりゐたり、泣いてばかりゐたり、すねてばかりゐるた、更に幼なかつた人達を、今日この様に元氣な、自立的な子供にするのに、並々ならぬ苦心と苦勞がいつた筈です。ほめても貰ふべき所を、反對に悪くくらられるのですから、實に氣の毒な事でありませう。

若し幼稚園の先生が、引續き一年生を擔任したまはせませう、決して學校の先生の様な感じを抱きませぬのみか、かへつて幼稚園へ行かなかつた子供は、萬事に手が多くかゝつて、さちらかさいふ多少迷惑に感じる。みんな幼稚園を出た子供ばかりならよいのと思ふだらうと思はれます。

現に私の知つてゐる或る學校では、團體生活になれた幼

幼稚園出身の子供の混合してゐる事は、一年生初歩の取扱上非常に都合よしとして、一年生のこのクラスにも、幼稚園出身児を配當される様に、一年擔任の方々から、申出がある云ふ事を聞いて居ります。我田引水かも知れませんが、これは私は公平な本當な考へだと思ひます。

次に知つたかぶりをして困る、こいふ話もありますが、これにて前述の理由に等しく、一年の子供と言つたら、餘りに何にも知らぬこ、きめてかゝるからだと思ひます。やはり幼稚園の先生が持ち上つたしたら、邪魔になる所か、大いに利用し、活用する所で、幼稚園から來た子供は、やつぱりいゝこ、頗る満足なる點ではないかと思はれます。

幼稚園出身児の一番學校の先生に邪魔だと思はれるのは、算術と讀本の時間——殊に讀本の時間でないかと思はれます。サア今日から讀本卷一を教へてやらうと思つて、やをら第一ハナの所の掛圖を掲示するこ、

「先生、知つてゐます。そこハナです」。

「先生、ハナつて僕かけます」。

なごこ、失つぎばやに發言されるこ、幼稚園の子供、先生

になれ親しんで、むやみな遠慮のしない子供つて事を、知らなかつた先生は、自分の計畫を、めちやくにされた様な感じを、或ひは起すかも知りません。そこで幼稚園出身の子供は、迷惑がられる事になるのでせう。サルカニ合戦を取扱ふ所にくる、子供は何にも知らぬつもりで、

「これから、サルカニ合戦のお話をしてあげませう」。

こでも言はふものなら、

「先生、幼稚園できました」。

「先生、僕、出來ます」。

なごこ、盛に發表したがりです。自己を示さうとします。先生、事志、違ふこいふわけで、がつかりしてしまひます。そこで幼稚園から來た子供は邪魔に考へられるこいふ事になるのでせう。

父兄の中には「兎に角幼稚園へ行つた子供は、さうも先生のお邪魔になる様に伺ひますので、考へものだこも思ひます」。こおつしやる方もあります。これは確かに父兄側として、一理ある言葉と思ひます。

さて枝葉末節について、兎角の否難が時に加へられるこ

しても、幼稚園教育の原理を否定出来ない限り、少しも氣にする必要はないと思ひます。そして教育上個性を尊重し、能力に即した取扱の大切な事は、更めて論ずるまでもない事で、然らば私の所謂、優秀兒の取扱といふ事も、尙然吾吾の爲さねばならぬ事であります。たゞひ學校なきへ行つてから、多少の否難はありしても、吾々は吾々の信ずる方向に、一生懸命に、恐れずに進んで行かねばなりません。唯心すべきは、私共自身間違つた教育をせないといふ深き注意も、一つ私共の教へ子を、一々完全に、十分に學校の先生に引繼ぐだけの熱意と工夫とがなければなりません。之が幼稚園の教育を、學校側に理解せしめる働きもなり、私共教へ子の幸福を加へる手段ともなる事と信じます。

五

以上によつても、幼稚園の優秀兒に對しては、優秀兒として、相當の考慮をはらつてやらねばならぬといふ事に、いくらか觸れて來たのでありますが、更らに今少しくこの點をつき進んで論じて見たいのであります。

よく六歳以後で音楽を始める様な事では、到底大音楽家

になれないといふ様な話を、耳に致しますが、漁夫なきでも、此の頃の子供は學校へ行くから、櫓漕ぎが下手だといふさうです。之によつて見ても、年をこつてから始めては、もう一生伸びなかつたり、又伸びても、其伸び方が悪かつたりする事は、事實です。此様に教育を始める時期が遅れば遅れる程、能力發現の割合が少なくなる事を、能力可能性遞減の法則と申します。よく心理學の書物なきに、雖が親について廻はる能力の發達期間は四日間位で、其の間を親と全く隔離すれば、最早親をしたふ性能を喪失するまかかれてゐます。斯る如く吾々人間の子供でも、やはり其能力發達の爲めには、指導の時期があるのであり、此間によき注意、よき教育が施こされるか否かは、其の子供にこつて、實に重大な關係を持つといふ事が分るのであります。

さて私共は私共の子供達が持つ、良い萌芽を見落してはゐなからうか。又見出し得たとしてもよく伸展せしむべく努力をしてゐるだらうか。十分に考へない人達の唯一がいな、幼稚園で教へてはならぬといふ言議に従ひ過ぎる場合は多くなからうか。私は幼稚園の本當の教育といふもの

は、其の子供々々の天分を見出して、其の性能に應じて、充實した良き生活をさせるにあると言ひたいのです。幼稚園は子供を愉快に、ほがらかに遊ばせる所であるといふのは、間違ひのない事であつても、唯子守がわけもなく子供を遊ばせたりするのは、大きな差がある筈です。

そして私の考へる所では、今の幼稚園では、天分豊かな子供に對しての輔導といふ事は、一番缺けてゐるのでないかと思はれるのです。さてこういつても學校の様な方式で學問の教授をせよといふのではありません。正しい着眼、

正しい方法によつて、其の恵まれた天分を伸ばしてやりた
いといふのです。私共の子供達の中にも、ピットや、バ
カルや、ゲーテの卵も居やうではありませんか。人生に於
ての最も大切な時期を預かる私達が、自己の不注意の爲に、
努力の足りない爲に、此大切な卵を殺してしまふ様な事
をしては、其の本人の爲めは申すまでもなく、廣く人類社會
の發達の爲に實に残念な事だと思はれてなりません。

よき注意の下に、正しき教育の施される事は、如何に偉
大な働きのあるものかといふ事を知つて頂くために、以下

二三の例を擧げて見ます。(小原國芳氏、母の爲めの教育學
による)。

バスカル物理學に於ける「バスカルの原理」や數學の
「バスカルの六邊形」で有名なバスカルは、物理學や數學
の大恩人です。しかも「バスカルの定理」にして有名な六
邊形の問題は、まだ十六歳の紅顔の少年バスカルによつ
て發見されたのです。これは彼の父ミ、姉の早教育の賜
です。

ロード・ケルヴィン即ちウイリアム・トムソン彼の父
は、ジェームスミ、ウイリアムの兄弟の二人を、口が利
く様になるや否や、読み書きをはじめ、妻と一緒に數學、
歴史、地理、博物などを教へました。ジェームスが十歳、
ウイリアムが八歳の時には大學の講義の聽講に出まし
た。成績良好で、二年後十二歳で正式にグラスゴ
ー大學に入學を許可されました。しかも一番二番はい
つも兄弟二人でしめて居ました。しかも彼等は二十すぐ
れば凡みの人でなくて、兄は工學の大家、弟はロード・
ケルヴィンにして大物理學者となり、兄は七十歳、弟は

八十三歳まで活動致しました。

七六

ジョン・スチュアート・ミルは政治學や倫理學、經濟學や論理學で有名なミルです。彼の父は、生後一年半にして、自國語の教育を始めました。三歳の時からギリシヤ語、八歳からラテン語を始めました。有名な功利説は彼の十六歳の時の學説です。そして彼は蒲柳の質でしたが、六十七まで生きました。

詩聖ゲーテは八歳で、ドイツ語、フランス語、イタリー語、ラテン語、ギリシヤ語を自由に読み書きが出来ました。彼の傑作「ゲッツ」は二十二歳の時の作です。そして八十三の長壽を保ちました。ピットは二十三で大藏大臣になり、二十四で總理大臣になり、國務多端の際祖國を擔つて立つたピットも早教育を受けた人です。

カール・ウイッテは最も有名な教育的に大事な例は、ウイッテの父が其の子に施した教育です。子供は赤ん坊の時から教育しなければ、眞に偉大ならしめる事は出来ない。ウイッテは氣の毒な程發育のわる

い子でした。「如何なる罪科のために、神はかくの如き痴鈍な子を我に賜はつたものか」父も嘆いた位でした。近所の人達も白痴だと思つてゐました。父は非常に努力致しました。その結果、近所の人達も全く驚きました。

八九歳でドイツ語、フランス語、イタリー語、ラテン語、英語、ギリシヤ語の六つに通じました。動植物、物理化學、數學に通じ、特に數學に秀で、九つの時にはライプツヒ大學の入學試験に及第し、十四の時には哲學博士になり、十六の時には法學博士になり、ベルリン大學の教授になりました。藝術にも深い研究を有し、ゲンテ研究の泰斗になりました。八十三歳の高齡まで、高評噴々たる講義をつづけました。

さて誤解のない様に、再び繰り返しますが、所謂早教育を主張するのでありません。要はもつとも個性を重視した教育でありたいといふ事、引いては今少しく優秀兒童の取扱ひに考慮を致したいとの主張に他ならぬのであります。

幸ひに私共の見識が方法が正しく、且つ熱心な努力が
つゞけられて、或程度までよく指導された子供があるとし
て、果して小學校へ行つてからも、かく一貫した精神で教
養がつけられて行くだらうか、これにはどうしたらよか
らうか、こうした疑問がきつて生ずる事と思ひます。これ
にはまづ幼稚園としては、其の子供に關しての觀察、録しで
もいつたものを作つて、入學と同時に其の學校の校長又は
擔任の先生に提出して參考に供する事が要件の一つだと思
ひます。次にはそれぐの入學校に幼稚園側から出張して、
校長なり、擔任の先生なりに親しく會つて、其の子供を引
きつぎ且つ相談する事も大切でせう。或は其の年度の一年
擔任の先生を幼稚園に招待して懇談會を開く事なごも、有
益な方法の一つでせう。

(しかしてこの點は、學校へ幼稚園の併設されてゐる所で
は、相當好都合に行くのではないかと考へます。そこではま
づ幼稚園の先生は必らず小學校の二三年まで持ち上る事に
すれば、第一早速に異なつた方法、精神で教育される心配
はまづなくなりませう。そして幼稚園の先生も、學校の先生

とは循環的に交代されるので、幼稚園と小學校との教育は
相互によく理解され、殊に校長が園長を兼ねてゐる事でも
あるから、まづ一貫した教育が施される筈だと思ひます。
こんな所では實際問題として、まづ保母の質と資格の向上
をはかつて、訓導兼職する必要も生じませう。

この優秀兒の取扱ひといふ事をよくやらうと致しますに
は、獨立した幼稚園に於ても、すべて今一段保母の質の
向上といふ事をはからねばならないのは勿論だと思へてゐ
ます。

尙また、其の子供の直接の教育指導者は、幼稚園から小
學校へいつながらぬ場合は多いにしても、保護者、父兄とい
ふものはまづ一貫して變らないものであります。故にこ
の優秀兒の取扱ひに於ても、最も大切な要素の一つは父兄
であります。よつて幼稚園時代から、その父兄をして其の
子の教育の完成の爲めには、自己は重大な責任を持つてゐ
るものであるとの、十分なる自覺を與へ、小學校へ進んで
からも、其の擔任の先生と緊密なる連絡をこつて、益々熱心
に其の子の教育に當らしめねばならないと思へます。(丁)